

乳幼児精神発達検査にみられる 両親評定と教師評定の差異について (III)

	進	野	智	子
長崎大学教育学部 附属幼稚園	竹	内	チ	カ子
〃	宮	川	芳	子*
〃	溝	上	涼	子**

A Study of the Discrepancies in the Evaluations of a Developmental Test by Parents and Teachers (III)

Tomoko SHINNO

Chikako TAKEUCHI

Yoshiko MIYAGAWA

Ryoko MIZOKAMI

目 的

筆者らは先の報告(1979, 1980)において、精神発達の程度が各分野毎に明らかにされる乳幼児精神発達検査を使用して、3歳児を対象に入園時と6ヶ月経過した時期における幼児の精神発達について幼児の両親と2名の教師による評定を実施した。その結果、入園時においては、常に両親が教師よりも高い評定をすることは限らないこと、教師間の評定には、男・女児群の運動分野、女児群の社会の分野に高い相関がみられること、三者による評定には全児の運動分野において有意な一致がみられることが明らかにされた。入園時から、6ヶ月経過後においては、運動の分野においては常に両親が教師よりも高い評定をすることは限らないこと、またこの分野において三者の評定には有意な相関がみられること、評定に高低の差はあれ2名の教師の評定に有意な相関が多くみられ、子どもの評定がかなり一致してくる傾向がみられること、親の関心が高い分野ほど教師と親の評定が一致してくる傾向がみられることが明らかにされた。

* 現、長崎市立東長崎中学校

**現、長崎市立虹ヶ丘小学校

本研究は、被験児の人数をさらに増やし、既報（Ⅰ）（1979）、（Ⅱ）（1980）と同時期に精神発達質問紙によって親と教師が評定した場合、被験児の性、被験児の出生順によって各評定時期にどのような差がみられるか、また、評定者間の評定には各評定時期にどのような差がみられるかについて検討することを目的とする。

手続・方法

被験児：既報と同じ幼児と1979年4月に入園した3歳児それぞれ15名ずつの幼児である。被験児の分類は既報と同様の方法である。各評定者の5月評定時における被験児の生活年齢は表1に示す通りである。

表1 被験児の生活年齢（5月評定時） (ヶ月)

被 験 児	評 定 者 生活年齢	両 親		教 師 L		教 師 X		被験児の 男女比
		平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	平 均	標準偏差	
全 児		42.93	3.24	43.93	3.22	43.87	3.27	15: 5
長 子 群		43.08	3.90	44.15	4.03	44.23	4.13	6: 7
非 長 子 群		42.88	2.74	43.76	2.54	43.59	2.53	8: 9
男 児 群		43.20	3.17	44.33	3.20	44.20	3.28	15: 0
女 児 群		42.67	3.39	43.53	3.29	43.53	3.34	0:15

評定者および評定時期：既報と同一の評定者と1979年入園児の親と1979年の3歳児クラス担任教師1名である。親の5月評定時の年齢は表2に示す通りである。

表2 評定者（両親）の生活年齢（5月評定時） (歳)

被 験 児	平均年齢他	平 均 年 齢	標 準 偏 差	評定者の男女比
全 児		32.13	4.64	2:28
長 子 群		29.00	2.35	1:12
非 長 子 群		34.00	4.39	1:16
男 児 群		31.47	4.27	1:14
女 児 群		32.80	4.90	1:14

3名の教師をL, X₁, X₂とする。教師Lの1978年5月の評定時の年齢は27歳であり、教師X₁のそれは23歳、教師X₂のそれは22歳である。教師L, 教師X₁の保育経験は既述（1979）した通りである。教師X₂は、新採用の教師で5月評定時には保育経験1ヶ月余である。教師X₂はまた、11月評定時には教師X₁と同じく被験児の入園後5ヶ月後に1ヶ月間他の年長クラスを担当し、評定時にはまた3歳児クラスに戻っている。

親による評定は、既報（Ⅰ）、（Ⅱ）とほぼ同一の時期であり、その評定間隔も等しくなる

ようにコントロールされた。

質問紙：既報と同一の津守ら(1965)による「乳幼児精神発達質問紙(3歳から7歳まで)」を使用した。

結果の整理：既報と同一の方法である。

結 果

1) 全児の比較

各評定時における各分野毎の各評定者による発達指数は、表3・表4に示す通りである。

表3 全児・長子群・非長子群の発達指数(5月評定時)

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X
全 児	145.60	113.70	135.80	123.33	80.37	101.80	130.97	78.47	113.33	138.23	102.90	110.57	135.70	91.60	119.60
	21.31	26.63	31.05	20.25	6.77	18.26	20.84	5.70	19.31	23.71	12.50	11.26	21.56	12.08	21.49
長 子 群	140.46	114.85	144.69	119.69	80.23	106.23	121.92	78.77	119.77	142.85	105.15	113.85	135.00	93.23	130.54
	21.62	26.34	26.88	15.84	6.89	20.13	12.19	7.06	18.72	24.69	14.54	10.37	20.20	13.47	15.62
非長子群	149.53	112.82	129.00	126.12	80.47	98.41	137.88	78.24	108.41	134.71	101.18	108.06	136.24	90.35	111.24
	20.21	26.82	32.28	22.68	6.67	15.88	23.28	4.36	18.28	22.29	10.37	11.26	22.52	10.74	21.61

表4 全児・長子群・非長子群の発達指数(11月評定時)

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X
全 児	146.90	121.00	140.83	127.47	72.43	102.97	133.57	76.67	113.83	143.53	90.43	105.03	132.33	88.53	119.93
	15.96	30.22	20.69	24.13	10.12	19.44	22.11	10.42	14.27	23.80	16.20	13.70	16.14	17.76	14.18
長 子 群	148.85	132.77	140.54	128.62	74.15	99.23	135.35	77.85	113.38	150.85	93.92	104.85	138.38	90.54	120.54
	13.64	24.84	19.59	20.58	13.89	14.18	16.36	9.96	11.91	22.60	16.76	13.26	11.37	20.89	11.00
非長子群	145.41	112.00	141.06	126.59	71.12	105.82	132.24	75.76	114.18	137.94	87.76	105.18	127.71	87.00	119.47
	17.39	30.87	21.49	26.50	5.40	22.23	25.56	10.67	15.83	23.17	15.23	14.03	17.65	14.74	16.19

表の上欄は発達指数の平均値を、下欄は標準偏差を示す。表3・表4において評定者の欄のPは親を示し、Lは教師を、Xは教師X₁と教師X₂を表わす(P、LおよびXに関しては以下同じ)。表3・表4のXの数値は、X₁とX₂を平均した値である。同一の幼児についての三者による評定の一致度は、表5・表6に示す通りである。

表5 全児・長子群・非長子群の評定の一致度(5月評定時)

分野 被験児	運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語
全 児	0.58**	0.47°	0.59**	0.44	0.48°
長 子 群	0.47	0.53°	0.54°	0.36	0.43
非長子群	0.66*	0.41	0.61	0.45	0.50

表6 全児・長子群・非長子群の評定の一致度（11月評定時）

分野 被験児	分野				
	運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語
全 児	0.70**	0.70**	0.49	0.51*	0.68**
長 子 群	0.70**	0.72*	0.55°	0.56°	0.82**
非 長 子 群	0.72**	0.70**	0.39	0.39	0.58*

一致度はケンドールの一致係数によった。表中の **印, *印は有意差検討の結果それぞれ 1%, 5%水準で有意であることを示し, °印は10%水準で傾向のあることを示す（以下同じ）。

各評定者間の評定の相関は表7・表8に示す通りである。

表7 全児・長子群・非長子群における評定者間の相関（5月評定時）

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P
全 児	0.232	0.611**	0.242	0.350	0.275	0.311	0.298	0.370*	0.017	-0.074	0.314	0.129	0.541*	-0.140	0.070
長 子 群	0.123	0.416	0.093	0.428	0.021	0.403	0.324	0.679*	-0.018	-0.152	0.305	-0.247	0.612*	-0.192	-0.183
非 長 子 群	0.344	0.754**	0.464	0.320	0.553*	0.352	0.441	0.008	0.221	-0.048	0.283	0.354	0.509*	-0.248	0.229

表8 全児・長子群・非長子群における評定者間の相関（11月評定時）

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P
全 児	0.379*	0.645**	0.329	0.195	0.126	0.281	0.525**	0.534**	0.540**	0.170	0.167	0.448*	0.455*	0.528*	0.502*
長 子 群	0.482	0.603*	0.327	0.217	0.565*	0.195	0.822**	0.502	0.587*	0.459	0.348	0.415	0.696*	0.800**	0.616*
非 長 子 群	0.310	0.742**	0.336	0.236	-0.272	0.330	0.397	0.565*	0.529*	-0.146	0.034	0.507	0.336	0.387	0.486*

親による評定は三者の中で全般的に高い。各評定時とも運動の分野において三者の評定に 1%水準で有意な一致がみられる。探索・言語の分野においては、5月評定時においては10%水準で傾向があるにすぎないが、11月評定時においては、両分野とも 1%水準で有意な一致がみられる。社会の分野においては、5月評定時には 1%水準で有意な一致がみられるのに、11月評定時には、三者の評定に有意な一致はみられなかった。しかし、全般に、5月評定時より11月評定時の方が、三者による評定の有意な一致が多くみられた。

各評定時における各評定者間の相関は、11月評定時の方が有意な相関が多くみられた。特に社会の分野においては、各評定者間ともに10%水準で有意な相関の傾向がみられ、言語の分野においても、各評定者間に 5%水準で有意な相関がみられた。運動の分野に関しては、L-X間に各評定時とも10%水準で有意な相関の傾向がみられた。

2) 長子群・非長子群の比較

各評定時における三者の評定をみると、親Pは長子群において5月評定時よりも11月評定時の方が、運動・社会・生活習慣の分野に高い評定をしている。教師Xもまた非長子群を長子群より11月評定時の方が、運動・探索・社会・言語の分野において高く評定している。教師Xはまた、5月評定時において他の二者より長子群の運動の分野を一番高く評定している。5月評定時においては、親Pは長子群より非長子群を高く評定する傾向にあるが、11月

評定時においては逆になっていることがみられる。教師Xについては、11月評定時において非長子群を長子群より高く評定している。生活習慣・社会の分野において親Pは、11月評定時に長子群を高く評定している。教師Lにおいては、各群定時においても長子群を非長子群より高く評定する傾向がみられた。

三者の評定の一致に関しては、運動の分野においては、5月評定時において非長子群に5%水準で有意な一致がみられたが、11月評定時には長子群・非長子群ともに1%水準で有意な一致がみられた。言語の分野においては、5月評定時には両群ともに有意な一致はみられなかったが、11月評定時には長子群に1%水準、非長子群に5%水準で有意な一致がみられた。探索の分野においては、5月評定時には長子群だけに10%水準で有意な一致の傾向がみられたにすぎないが、11月評定時には長子群に5%水準、非長子群に1%水準で有意な一致がみられた。社会の分野においては、5月評定時には長子群に10%水準で一致の傾向が、非長子群に5%水準で有意な一致がみられたが、11月評定時には長子群にだけ10%水準で一致の傾向がみられたにすぎない。三者による評定の一致は、5月評定時より11月評定時の方が、両群とも一致の傾向が多くみられた。

各評定者間の相関に関しては、言語の分野において、11月評定時の長子群に各評定者間に有意な相関がみられた。運動の分野においては、5月評定時には2名の教師間に非長子群において1%水準で有意な相関がみられたが、11月評定時には各群に5%水準、1%水準で有意な相関がみられた。教師Lと教師Xの間に、探索の分野で長子群に5%水準で有意な逆相関が11月評定時にみられた。

3) 男児群・女児群の比較

各群の各評定者による発達指数は、表9、10に示す通りである。

表9 男児群・女児群の発達指数 (5月評定時)

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X
男 児 群	149.07 18.29	110.33 21.42	131.00 29.57	117.13 18.59	81.13 7.74	91.33 12.99	129.40 19.32	77.33 4.50	106.47 17.83	144.00 21.39	105.00 12.02	107.73 12.58	133.73 19.56	93.47 14.31	116.33 21.82
女 児 群	142.13 23.13	117.07 30.61	140.60 31.74	129.53 19.95	79.60 5.52	112.27 16.71	132.53 22.13	79.60 6.49	120.20 18.25	136.47 25.69	100.80 12.62	113.40 8.89	137.67 23.21	89.73 8.97	122.87 20.65

表10 男児群・女児群の発達指数 (11月評定時)

分野 評定時 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X	P	L	X
男 児 群	144.40 16.79	123.40 25.25	139.60 19.46	124.87 22.49	72.00 5.68	98.60 18.54	130.87 17.94	76.87 11.47	112.27 11.85	150.47 24.12	92.20 16.63	106.00 8.00	128.53 11.47	88.93 19.27	116.80 12.85
女 児 群	149.40 14.67	118.60 34.32	124.07 21.49	130.07 25.40	72.87 13.12	107.33 19.34	136.27 25.31	76.47 9.26	115.40 16.18	136.60 21.32	88.67 15.57	104.07 17.59	136.13 19.00	88.13 16.09	123.07 14.75

5月評定時において三者は、社会の分野において女児群を男児群より高く評定し、11月評定時においては探索の分野において女児群を高く評定している。各評定時における教師Xの評定は、各分野とも男児群より女児群の評定の方が高い。親Pの評定は5月評定時に運動の分野を除き、また11月評定時に生活習慣の分野を除いて他の分野はすべて男児群より女児群の評定が高い。教師Lの評定は、5月評定時に社会・運動の分野において女児群を高く評定している。

三者の評定の一致に関しては、表11、表12に示す通りである。

表11 男児群・女児群の評定の一致度（5月評定時）

分野 被験児	分野				
	運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語
男 児 群	0.61 [*]	0.40	0.73 ^{**}	0.57 [*]	0.49
女 児 群	0.57 [*]	0.46	0.42	0.37	0.49

表12 男児群・女児群の評定の一致度（11月評定時）

分野 被験児	分野				
	運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語
男 児 群	0.71 [*]	0.71 ^{**}	0.50	0.48	0.58 [*]
女 児 群	0.68 ^{**}	0.67 [*]	0.50 ^o	0.55 ^o	0.75 ^{**}

三者の評定は運動の分野では、5月・11月評定時とも両群ともに、5%以上の水準で有意な一致がみられた。5月評定時に男児群において社会・生活習慣の分野において5%以上の水準で有意な一致がみられなくなり、逆に女児群に10%水準で傾向がみられた。探索・言語の分野においては、11月評定時には両群ともに5%以上の水準で有意な一致がみられた。女児群においては、11月評定時にすべての分野に10%以上の水準で一致の傾向がみられた。

各評定者間の相関は、表13、表14に示す通りである。

表13 男児群・女児群における評定者間の相関（5月評定時）

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P
男 児 群	0.525 [*]	0.409 [*]	0.469 [*]	0.551 [*]	0.757 ^{**}	0.528 [*]	0.133	0.523 [*]	0.068	0.130	0.638 [*]	0.098	0.538 [*]	-0.082	0.099
女 児 群	0.112	0.740 ^{**}	0.134	0.239	0.086	-0.081	0.388	0.202	-0.078	-0.261	0.035	0.229	0.667 ^{**}	-0.189	0.020

表14 男児群・女児群における評定者間の相関（11月評定時）

分野 評定者 被験児	運 動			探 索			社 会			生 活 習 慣			言 語		
	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P	P-L	L-X	X-P
男 児 群	0.559 [*]	0.646 [*]	0.238	0.233	-0.086	0.246	0.707 ^{**}	0.588 [*]	0.576 [*]	-0.002	0.089	0.540 [*]	0.385	0.375	0.562 [*]
女 児 群	0.279	0.662 [*]	0.416	0.189	0.217	0.281	0.417	0.532 [*]	0.512	0.324	0.215	0.466	0.586 [*]	0.739 ^{**}	0.439

5月評定時には男児群の探索の分野に、11月評定時には社会の分野において、三者間の評定に有意な相関関係がみられた。L-X間の11月評定時における運動・社会の分野において、男・女児群ともに5%水準で有意な相関がみられた。言語の分野においてP-L間に5月評定時に男・女児群ともに5%水準で有意な相関がみられたが、11月評定時には女児群のみに5%水準で有意な相関がみられた。

考 察

本研究は、3歳児の精神発達について親と教師2名に入園後日の浅い5月とそれから6ヶ月経過後の11月に評定を求めることにより行なわれた。両年とも、5月に親はこの評定をす

る以前にこの種の精神発達質問紙に回答の経験はなく、また幼稚園での子どもの状態を見る機会が非常に少ない状態で評定をした。しかし、11月には兩年とも評定までに園での子どもの状態を多く観察した結果評定した。教師 X₂ は、教師 X₁ の後任であり1979年に新たに3歳児の保育にあたっている状況のもとでの評定である。

5月評定時に比較すると、11月評定時にはかなり多く三者の評定に有意な一致がみられるようになった。ことに運動・探索・言語の分野において被験児群すべてに三者間に有意な一致がみられた。運動・言語の分野において、三者間に高い相関がみられたのは、1978年に健康領域と言語領域の研究に幼稚園が取り組んできたため、子どもの評定に際して、これらの研究課題遂行によって培われた判断基準が、三者の評定を有意に一致させたものと考えられる。

以下、考察を結果の分類に従って進めていく。

運動の分野においては、各評定者の評定にほとんど差がなく、L-X間の評定には特に有意な相関が11月にはみられるようになってきている。これは2名の教師が園の研究課題として運動の分野を取り上げたことおよび客観的に評定しやすい分野であることによると考えられる。

社会の分野においては、11月評定時には三者間の評定に有意な相関が多くみられるようになった。これは教師が、幼児の発達の中で友人と交わるように社会の分野に関心をもつように言及してきたことおよび教師2名の共通の観察経験の増加によると考えられる。この分野でのP-L間の有意な相関については、表15の「親の関心度」からも明らかにされるであろう。

表15 親の関心度

被験児	分野		運 動	探 索	社 会	生活習慣	言 語	被験児数
	月							
全 児	5月		2.73(1.29)	2.40(1.02)	3.07(1.76)	3.00(1.26)	3.80(1.22)	15
	11月		3.13(1.20)	2.53(1.18)	2.43(1.41)	3.10(1.42)	3.80(1.40)	30
長 子 群	5月		3.25(1.48)	2.75(0.83)	1.75(1.30)	2.75(0.83)	4.50(0.87)	4
	11月		2.85(1.29)	2.15(0.95)	2.23(1.37)	3.62(1.15)	4.15(1.10)	13
非長子群	5月		2.55(1.16)	2.27(1.05)	3.55(1.67)	3.09(1.38)	3.55(1.23)	11
	11月		3.24(1.11)	2.82(1.25)	2.65(1.45)	2.88(1.57)	3.41(1.50)	17
男 児 群	5月		2.57(1.40)	3.00(1.07)	2.86(1.64)	2.71(1.03)	3.86(1.45)	7
	11月		3.20(1.22)	2.40(1.25)	2.67(1.40)	2.93(1.34)	3.80(1.42)	15
女 児 群	5月		2.88(1.17)	1.88(0.60)	3.25(1.85)	3.25(1.39)*	3.75(0.97)	8
	11月		3.07(1.18)	2.67(1.07)	2.20(1.38)	3.27(1.48)	3.80(1.38)	15

()内はSDを示す

表15は、本検査施行時における精神発達の各分野について親の関心度を示すものである。調査はアンケート形式によって親の関心のある分野から順位づけをしたものである。これはまた三者の評定の有意な一致にもつながる。

生活習慣の分野においては、親の関心度は11月評定時には最下位であるにもかかわらず、

三者の評定間に有意な相関がみられ三者の評定も一致していた。これは親の研究活動・園の研究テーマとも関連しているといえよう。

探索の分野では、他の分野と異なり11月評定時の方が有意な相関も、有意な判断の一致もみられなくなった。その一因として、教師 X₁ と教師 X₂ の評定の差が考えられる。表16は、教師 X₁ と教師 X₂ の5月、11月評定時の評定を t 検定したものである。

表16 X₁, X₂の評定の差について

被験児	分野 評定時	運 動		探 索		社 会		生 活 習 慣		言 語	
		5月	11月	5月	11月	5月	11月	5月	11月	5月	11月
全 児		***	*	*	○					***	
長 子 群		*	*								
非長子群		***	***	○						**	
男 其 群		**	*	***						**	
女 児 群		***		**						**	

教師 X₁ と教師 X₂ の5月の評定時には、運動・探索・言語の分野において両者の評定に差があったが、11月評定時の評定では両者の評定には運動の分野を除いて有意差はみられなくなっている。これは11月評定時には、教師 X₁ が評価基準を上げ、教師 X₂ が評価基準を下げたことによると考えられる。

教師 L の11月評定時の評定の低下と教師 X₁ の評定の低下の原因として、約半年間の保育の結果、幼児に対する期待感からかえって評定が厳しくなったという内省が両者から得られた。逆に教師 X₂ の評定の上昇に関しては、幼児の可能性を予測した評価になったという報告がなされた。

5月評定時と11月評定時における各評定者間の相関に関しては、2名の教師 L-X 間に有意な相関が、社会・運動・言語の分野の順に増加しているが、これは2名の教師が同一の子どもを半年間の教育経験を通して判断する基準が接近してきた結果といえよう。

長子群・非長子群を比較した時、生活習慣・言語の分野において、親 P、教師 L は長子群を高く評定している。男児群・女児群とでは、11月評定時において親 P が生活習慣の分野で男児群の方を高く評定しているが、これらの親 P の評定は、この両群に対する親の評定の甘さを反映しているといえよう。

既報 I において述べたように、本研究において使用した質問紙による回答には、Cronbach (1945, 1950) のいう推量傾向が生じ易いことが当然考えられるし、また実際に質問項目の中には、家庭においてしか観察できない行動、逆に幼稚園における方が頻繁に観察可能な行動もあった。筆者らはこういう事実を熟知の上で、親と教師に同一の質問紙を使用し、全項目の回答を依頼した。もし、この質問紙の項目を分類し家庭でしか観察できない項目は親に、幼稚園における方が評定が容易な項目は教師にというように回答を求めるとすれば、それは本研究の目的からはそれたものになる。評定の一致度を求めたり、評定者間の相関を求める意味もない。森 (1961) の研究におけるように、1人の幼児の精神発達の実態を

より明らかにしていこうというものではない。同一の幼児を親と教師が評定をしたときにみられた評定の差異は、両者がこの評定をもとに、それぞれの評定者のよく知らない場面における幼児の行動について考えるときに非常に示唆的であると思われる。本研究においては、精神発達の諸分野の中で比較的把握しやすい分野とそうではない分野があることが明らかにされ、評定期期の違いによってもこれらが変化することが明らかにされた。

評定者の中に、教師Lと教師 X₁ および X₂の間には教育経験年数には、6～7年の差があった。教育経験年数を変数に取ることは本研究においては、教師がのべ4名しか参加していない、余りに統計的標本としては少なすぎる。しかし、最初の評定から6ヶ月経過した時点の評定に有意な一致が多くみられるようになったこと、有意な相関が多くみられるようになったことは、同一の子どもの観察経験を重ねることによる子どもを見る目が似通ってきていることを示すものと考えられる。精神発達の評定は、発達指数で明らかにされた。これによると、1978年、1979年も親の評定間には有意な差がみられなかったが、教師 X₁ と教師 X₂の評定に表16で明らかにされるような有意な差があった。評定の基準に高低の差があったことを示すものであるが、一致度に関して有意な一致のみられた事実は、一致度が順位づけを基に算出されるものであるという性質からしても、両者の評定には、高低の差こそあれ、子どもの集団の中での位置づけは一致していたことを明らかに示すと考えられる。

要 約

親と教師2名が同一の3歳児に津守式精神発達検査による評定を入園後日の浅い5月と6ヶ月経過後の11月に2度にわたって実施した。その結果、以下のことが明らかにされた。

1. 運動の分野は客観的に評定しやすい分野である。
2. 社会の分野においては、共通の観察経験をもつことにより教師間の評定が一致してくる傾向がある。
3. 生活習慣の分野におけるように評定の困難な分野もある。
4. 評定の一致に関しては、運動・言語の分野にみられたように、園の研究課題との関連も考えられる。
5. 男児群より女児群の評定が全分野にわたって高かった。これは女児の方が男児よりも発達が一般に早い事実を示すものと考えられる。
6. 生活習慣の分野において親の評定は、非長子群よりも長子群の方が、女児群よりも男児群の方が評定が高かった。
7. 教師間の評定は、6ヶ月経過後の評定の方が有意に相関が多くみられた。
8. 教師によっては、6ヶ月経過後の評定の基準が、幼児に対する期待感や幼児の可能性を予測することによって評定が低下したり、上昇したりする事実がみられた。
9. 探索の分野においては、教師間の判断基準が一致しにくい。

引用文献

- Cronbach, L.: Further evidence on response sets test design. *Educ. psychol. Measmt.*, 1950, 10, 3-31. 「心理検査における反応の心理」岩脇三良, 日本文化科学社, 1973年より引用。
- Cronbach, L.: Response sets and test validity. *Educ. psychol, Measmt.*, 1946, 6, 475-494. 前掲書より引用。
- 森重敏: 知的優秀児の性格特徴に関する一研究。東京家政大学研究紀要 第2集, 1961, 77-84.
- 進野智子・竹内チカ子・宮川芳子: 乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について (I), 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 第26号, 1979.
- 進野智子・竹内チカ子・宮川芳子: 乳幼児精神発達検査にみられる両親評定と教師評定の差異について (II), 長崎大学教育学部教育科学研究報告, 第27号, 1980.

(昭和55年10月31日受理)